

町制施行20周年記念作文

最優秀賞作品紹介

「ぼくの生まれたばしょ」

しじま小学校 一年

ふくろう ゆう

「ながしまちゅうは、どんなところ。」「そうきかれたら、ぼくは、「うい」たえるよ。「うい」のぼしゅだ」

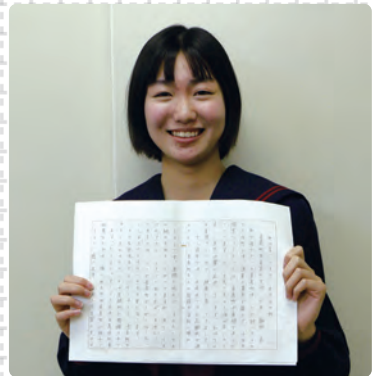
「うみは、きれいだからたくさんのおさがながすんでいるよ。ながしまの人たちがそでたブリは、口に入れたら、とろってとろけてすぐおじいよ。」

「おみそしるに入れたらおいしいアオサのりもあるからね。ぶゆになると、まるで、みどりのじゅうたんをひいておみしたいというみになるのおおじいよ。」

そして、山には、オレンジのお花がさいているみたいに、たくさんミカンがあるんだよ。あまくてとつてもおじいよ。」

やさしい人がたくさんいて、ぼくを見たら手をふってくれたり、はなしかけてくれたりするんだよ。だから、ぼくは、ながしまちゅうが大好きなんだよな。」

ぼくが大きくなったも、ながしまちゅうは、「う」ままのいかな。ながしまちゅうは、これからもずっと、「う」のぼしゅだね。」



「私の育ってきたこれからの町」

長島中学校 三年

脇田 ひかる

私の住んでいる長島町は、人口約一万人の「小さな町」です。漁業と農業が盛んで、十五年食へてきたぶりは、長島町が養殖日本一だといえます。どこを見ても山と海が目に入り美しい自然が常に広がっています。私はそんな素晴らしい町で、健康に育ってきました。しかし近年では、日本中で少子高齢化が進んでおり、長島町もその問題が深刻に現れているようです。実際に住んでいるとたくさん魅力を知ることができ、出てくればかりで入ってきける人がいません。このままでは、いつか長島町に人がいなくなってしまうのではないかと不安になります。」

そんな状況をどうにかしようと、長島町ではたくさんイベントが定期的に開催されています。トライジョング大会や長島造形美術展などは、多くの人々が長島町を訪れるように感じます。私は人々を楽しませようと奮闘している長島町を誇りに思います。しかし、今のままでは長島町に移住する、もしくはUターンで帰ってくる人々は少なくなる一方だと思えます。根本的な原因をどうにかする、も

しくは長島町に住みたいと思ってもらわなければならぬのです。」

そこで私はまず、長島町に住むうえで不便だと感じることを、両親や祖父母に聞いてみました。すると、交通手段の少なさや、農業の担い手がいないという話が出ました。私はこれ聞いて、大きな原因は人手不足から来ているのだらうなと思いました。」

長島町には、美しい海やおいしい食べ物、綺麗な空気など、受け継いでいくべき大切なものがたくさんあります。それをどうにか活用して、長島町にきたいと思わせるような行事のアイデアを私なりに出してみました。」

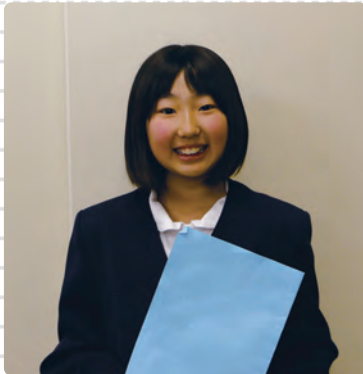
一つ目は、町外、もしくは県外からも参加することができる、自然を活かした体験イベントです。私が小学生の頃に参加したキャンプのイベントがとても楽しかったので、町外または県外の方も体験できるようにして参加者を募ると良いと思います。」

二つ目は、若者や移住者を増やすことについて考えました。私はこれが一番と言っているほど重要で考えていたのですが、父が「お試し移住とかはどうかな。」と、助言してくれました。確かにそれなら短期間で魅力が伝わり、空き家を安く貸し出すなどすると、とても気軽に来られる人がいるのではないかと、少しだけワクワクしました。私は新しく来る人だけでなく、ふるさとに帰ってきける人も大切だと思っています。確かに現在日本中で人手が足りていないため、長島町を見つけてくれる人は少ないかもしれませんが、私は一度でも長島町に来たらえれば、その魅力は伝わると思っています。みんなと協力して、私の故郷を大切にしていきたいです。」

他のどんな都会の町より、生まれ育ったこの長島町が好きで、きっと私はこれからどんな町に住んだとしても、帰りたいと思ってしまうでしょう。できることなら、海の前で家を建ててのんびりと過ごしたいです。その頃どうなっているかなんて誰にも分かりません。しかし、私の帰ってくる

場所はいつでもこの長島町で、ずっと守って行くべきみんなの故郷です。」

私がこの長島町を愛する気持ちはきつとずっと変わりません。改めて今一度伝えさせてください。私はこの長島町で育ててもらえて幸せです。」



「受け継がれてきたことを受け継ぐ」

鷹巣小学校 五年

宮路 菜奈

「これ、菜奈がしまい。」

長島では、何かをしなければならぬということを「何々しまい」と言います。「洗いまい？」とか「米をたきまい？」とか「洗たくしまい？」などです。他の地いきの人たちには伝わりにくい言葉ですが、長島の人は、この言葉をよく使います。わたしも口ぐせになっていて、今では、なんだかかわいいた言だと思っています。」

長島の人の中には、少し口調があらうような気がする人もありますが、みんな心は優しく、暖かい人ばかりだと思います。」

「菜奈、はよせんか。」

「こいを出しっぱなしにするな。」

「私は物心ついた時から、長島の言葉になれています。母はついでにできた時、毎日おこられている気がして悲しかったそうです。長島の人は、だれにでも気さくに話しかけてくれるし、野菜や海でとれた物を気前よく分けてくれます。おかげでわたしは、「ないだのじゃがいもいしかったです。ありがとうございました。」というあいさつがすぐにできるようになりました。長島で生産されるじゃがいもやブリー、青おさ、みかんなどは、人と人の「コミュニケーション」として、とても大切な役割になっていくと思います。」

私のそう祖父は、今、九十六才で、旧東町のころ、議員を二十八年していたそうです。町の発てんのために、県内外を視察して、他の地いきの良いところを取り入れたり、長島の素晴らしい自然や農作物を紹介していたそうです。」

そう祖父は、昔の話は、よく覚えていて、とてもうれしそうに話してくれました。黒の瀬戸大橋がなかったころは、船で阿久根に渡っていて大変だったこと。ご八日踊りには、島津忠謙の霊をなぐさめて、悪霊退散を願う行事で、各集落ごとに特色があって、それが受け継がれていること。長島造形美術てんは、以前は、東造形美術展として、はい材を利用して大きな作品を仕上げ、無料で観覧できる作品として始められたこと。知らないことだらけで聞いていくわくわくします。」

長島町制二十年目の今年。そう祖父が活やくしていたころに比べると、新しい時代に合ったものがたくさん取り入れられていることに気が付きました。もちろん新しいことを取り入れていくことも大切ですが、長島でしか体験できない伝統行事や他の地いきに自慢できる豊かな自然や農作物や海産物。そして長島に住む人の温かさなどは、これからもずっと残ってほしいです。」

「菜奈が一人で受け継ぎまい？」

「菜奈だけが受け継いで守っていきまい？」